

## 丁謂と『西崑酬唱集』

## 池澤 滋子

景德二年(1005)、北宋の眞宗が資令政殿學士王欽若、知制誥楊億らに命じて『歷代君臣事跡』(後『冊府元龜』と改名)の編纂を開始させたのを期に、この編纂事業の参加者を中心に外部の文人も加わり、頻繁に詩の應酬が行われた。大中祥符元年(1008)楊億がこれらの詩を編纂して『西崑酬唱集』と名付けた。主として楊億、劉筠、錢惟演の三人の酬唱によつて構成され、それに丁謂、李宗諤ら十五人の酬唱詩を加えて編纂されたものである。

歐陽修の『六一詩話』に「楊大年と錢、劉數公と唱和す。『西崑集』出でし時自ら人争つて之に效ひ、詩體一變す。」とあり、また田況の『儒林公議』に「楊億兩禁に在りて文章の體を變ず。劉筠、錢惟演の輩皆従つてこれに倣ひ、時に楊劉と號す。三公新詩を以て更に相屬和し、一時の麗を極む。億乃ち編してこれに敘し、題して『西崑酬唱集』と曰ふ。當時鐘簿の者これを西崑體と謂ふ。其の它的賦・頌・章・奏、頗る雕摘に傷ふと雖も、然れども五代以來の蕪鄙の氣茲れ由り盡きたり」とある。これらの酬唱詩は晩唐の李商隱の詩風を學び、典故の多用、對偶の重視、韻律の流麗さ、言語の妍麗巧緻等の特徴と

して『西崑體』と呼ばれ、この一群の詩人達は『西崑派詩人』と呼ばれた。

丁謂(966-1037)字は謂之。後に字を公言と改む。蘇州の長州(今の江蘇吳縣)の人。淳化三年(992)進士に及第、大中祥符五年(1012)參知政事、天禧四年(1020)同平章事、乾興元年(1022)晉國公に封ぜられる。この間一時的に中斷をはさんで宰相副宰相に任ぜられることほぼ十年にわたつた。

仁宗即位の年(1022)雷允恭が勝手に山陵を移した罪に連座して崖州の司戸參軍に左遷された。のち明道二年(1033)許されて祕書監致仕を授けられ、景祐四年(1035)光州で卒す。丁謂は生涯に口つて旺盛な文學活動を續け、『宋史』『藝文志』によると『虎丘集』五十卷をはじめとして三六〇卷にもぼる著作があつたという。しかし現存する詩文はわずかで、『全宋文』に三十餘編の文章、『全宋詩』に一二〇餘編の詩、『全宋詞』に二首の詞が著録されている他、『談錄』一卷と、詩文の斷片が残るのみである。

このため丁謂はその政治的な地位の高さに比して、文學的には殆ど忘れられているが、その詩五首が『西崑酬唱集』に収録されている(代意、「荷花」、「再賦」、「又贈一絶」、「梨」)ことから、これまで

文學史上では西崑派詩人とみなされてきた。例えば梁崑『宋詩派別論』(民國27年「國學小叢書」)の詩派分類によれば、丁謂は「西崑派(正派)」に所屬している。また東英壽氏の「西崑派文人丁謂について——王禹偁の古文運動と關連して<sup>1)</sup>」は新しい視點から丁謂の文學を論じたものであるが、東氏もまた丁謂を「西崑派文人」と呼ぶことに躊躇されない。

しかし私は丁謂を「西崑派詩人」とすることに問題があると考え。その一つの理由は『西崑酬唱集』と丁謂の關わりが稀薄であるという點にある。楊億を中心とする詩の酬唱は景德二年から大中祥符元年(1005-1008)の四年間に行われた。丁謂はこの四年間、眞宗の側近として終始朝廷に在り、同じく側近として『冊府元龜』編集にあつていた楊億らとも交流の機會が多くあつたと推測されるのだが、西崑酬唱に關わりをもつたのは初期の二年間のみであり、『西崑酬唱集』に於ける作品數も楊億らが七十首餘りであるのに對し、わずかに五首であつた。これは丁謂の七十年餘りの生涯と膨大な文學作品の中でもごく僅かなものであり、それをもつて丁謂を文學史上に位置付けることには無理があらう。

そして丁謂の現存する文學作品全體に目をむけた場合、その大部分の作風が、いわゆる「西崑體」と呼ばれるものとは異なるという點が、もう一つの理由として挙げられる。丁謂の現存作品をみると、その多くには典故の比較的少ない平易な語彙が使用されている。後述するが、先の東氏の論文にも示されるように、丁謂は進士及第以前から王禹偁の知遇を得、王は丁謂の詩文に對して「其の文は韓柳に類し、其の詩は杜甫に類す」(『薦丁謂與薛太保書』)、「二百年來文振はず、直ちに韓柳從り孫丁に到る」(『贈孫何丁謂』)と絶大な贊辭を贈つた。こ

のことから丁謂は青年時代優れた古文作家としての資質を認められていたと考えられよう。また現存する丁謂の詩中、西崑體作品は『西崑酬唱集』所收の詩以外に見あたらず、高位高官時代の詩も、晩年崖州司戸參軍に左遷され海南島にあつた時代の詩も、大部分は平易な詩語を用いた典故の比較的少ないものである。このことから丁謂の文學活動の僅少部分である『西崑酬唱集』への参加を以て、丁謂を「西崑派詩人」と位置付けることは早計であると言わざるを得ない。

## 二

それでは丁謂にとつて『西崑酬唱集』への参加はいかなる意味を持つものだったのか。そのことを考えるために、まず丁謂の經歷を『宋史』卷二八三「丁謂傳」、『續資治通鑑長編』等の資料によつて辿りたい。

丁謂は官僚としては華々しい經歷を経て宰相の地位にまでのぼりつめ、眞宗皇帝の寵愛を一身に集めて榮華を極めた人物である。そして丁謂の全生涯のエネルギーは、官僚社會での立身出世という一つの目的に集中していたといつてよいだろう。その目的達成のためには手段を選ばないやり方は、同時代や後世の人々に非常に憎まれ、「五鬼」という悪名を残すことになつた。しかし丁謂の朝廷での專横が顯著になるのは大中祥符元年(1008)、王欽若と共に眞宗を擁して、一連の道教を奉ずる宗教活動に荷擔して以後のことだ、それ以前は様々な方面で實績あげた能吏であつた。

淳化五年(994)から丁謂は福建轉運使として宋代の貴重な財源であつた鹽茶の管理を行い、咸平二年(999)峽路轉運使に任ぜられるや(同年夔州路轉使に改任)現地の少數民族の反亂を平定し歸順せし

め、當地で住民の信望を集めた。そして景德元年(1004)朝廷に召還されて以降は權三司鹽鐵副使から三司使へと朝廷の財政にあずかる職を歴任し、『景德農田勅』、『景德會稽錄』等を上奏して經濟官僚として多大な功績をあげていった。

これらの功績は丁謂が官僚として優秀であり、この時期丁謂は官吏の職務を果たすために粉骨碎心の努力をしていたことを示すものである。若い時期の丁謂を高く評價した人物に王禹偁、寇準らの英才がいることもうなずけるであろう。

しかし大中祥符元年以降は、丁謂はその才能を本来の職務の遂行にではなく、皇帝の嗜好を機敏に察知し、その寵愛を得て朝廷で勢力を伸ばすために用いたのではないか。天書降臨、泰山の封禪、玉清昭應宮建設等の道教的儀式に彩られた一連の行事を積極的に執り行ったのは、眞宗皇帝の崇道に乗じて自己の權力擴大を謀つたためと考えられる。

丁謂がいかに眞宗に對して忠節を盡くし、絶大な信頼を得ていたかは次の眞宗の御製詩に見て取れる。

懿辭碩畫 朝中に播しき、膝を造つめて謀を詢とふも 禮遇豊なり

(一入謝曰)

凝嚴の任を轍とむと雖ども、尤も倚注の情を増す

珀を擁して 帝闕を辭し、望を頼とめて都城を望む (寵行)

眞宗は大中祥符九年(1016)丁謂が參知政事を辭すると、丁謂を特に平江節度使に任じて故郷の蘇州に錦を飾らせ、自ら餞けの詩を贈つてそれまでの丁謂の忠節に感謝し、丁謂との別離の哀しみを詩に詠じたのである。

そして丁謂は天禧四年(1020)に同平章事に至るが、この頃から

專横なふるまいが多くなり、朝廷での政治鬭争も激しさを加えた。この年、密かに丁謂を斥け楊億に皇太子を補佐させようとした寇準の計畫が漏洩し、丁謂は寇準を參知政事より罷免したため、寇準復歸派から命を狙われるという事件があつた。若き日の丁謂の才能を高く評價したこともあつた寇準を相州からさらに道州、雷州へと左遷し、その地で死に至らしめたことは丁謂の悪名を高めた要因のひとつである。丁謂は寇準派を朝廷から一掃し、その中でただ一人難を免れた楊億もまもなく卒している。また共に宰相で犬猿の仲であつた李迪、以前は政治的協力者であつた王欽若までも陥れて左遷し、同時に薛顔、林特らを拔擢し自派の勢力を固めて行く。

乾興元年眞宗の死と共にその勢力を失い、雷允恭が勝手に山陵を移した罪に連座して海南島まで流されたが、なお丁謂は中央復歸への望みを捨ててはいなかつた。南遷の途上の作「飯僧疏」では、「中夏に歸るを賜われれば、黄泉亦た君恩に感ず」と、強い復歸への願望を吐露している。左遷の地においても丁謂は歸還のための畫策を怠らず、景祐四年に七十二歳で光州祕書監としてその地で亡くなるまで彼を憎む人々から中央への復歸を恐れられていた。

このように、丁謂は政界での權力鬭争を勝ち抜くために善惡を問わずあらゆる手段を弄した人物であつた。そしてそれは文學活動においても例外ではなかつたと考えられる。例えば丁謂は西崑酬唱以外にも西湖白蓮社の活動に参加し「西湖結社詩序」を遺しているが、これらはいずれも朝廷周邊の名士の集まりであり、丁謂がその人脈を自己の政治基盤作りに利用した公算は高い。また丁謂にとつては高級官僚として文學の才が必要であつたばかりでなく、私的な交際の上でも詩文の酬唱は缺くべからざる社交の一形態であつたはずである。例えば先

引の眞宗御製詩に唱和した二首が現存するし、また日本の僧寂照や、諸地方の高僧と詩の應酬を重ね、旅先での各地の寺院等で詩を所望されるとそれに應じていた形跡もある。

丁謂が詩文を藝術的達成を追求するものとしてよりも一種の社交の道具としての側面に重きを置いて作成したことは北宋初期の古文家王禹偁との係わりにおいて明らかに看取される。

先述したように、王禹偁は進士及第以前の丁謂を見いだして「其の詩杜子美に倣ひ深く其の間に入り、其の文數章 皆意常ならずして語俗ならず。もし韓柳の集中に雜ふれば能文の士をしてこれを讀みこれを辯ぜざらしめん」(送丁謂序)と絶賛し、積極的に朝廷の人士に推薦した、丁謂にとつては恩人といつてもよい存在である。そして王禹偁は「薦丁謂與薛太保書」中で「其の性孤特、其の行ひ介潔なり」と詩文の才のみならず、人格の高潔さをも高く評價している。

そして登科後も丁謂が朝廷でその才能を發揮する日を心待ちにし、福建轉運使として赴任する丁謂を送る詩には「節を持って又三殿従り出で、綸を頒ぶること還た一年に較べて遅し。朝中謬つて推賢の表を拜し、江畔空しく吟ず惜別の詩」(送丁謂之再奉使閩中)と自己の寂寥感を詠じている。王禹偁がかくも丁謂との別れに哀惜の念を示しているのは、年齢を越えた友として信頼を寄せていたからであろう。

にもかかわらず及第四年後の至道二年(999)に書かれた王禹偁の「答丁謂書」では、すでに兩者の交わりに溝が生じつつあったことが窺える。書の中で王禹偁が、「今謂之第一の進士にして一仲允を得。而して世と浮沈せんと欲して、自ら名節を墮すは、竊かに謂之の爲に取らざるなり」と述べることから、丁謂に何か「名節を墮す」行爲があり、王禹偁の「性孤特、行介潔」という丁謂への高い評價が訂正を

迫られるに至つたと推測される。

さらに王禹偁は書の中で丁謂への怒りを露わにする。又謂う、吾の職を去るは高亢剛直に由る者なりと。夫れ剛直の名は、吾れ誠に之有り。…吾れを高亢と謂うは則ち有る無し。何ぞや。吾れ主簿と爲ること一年、奔走して縣令に事へ、縣令と爲ること三年、奔走して郡守に事ふ。…是の如くして之を高亢と謂はば、吾れをして如何せん。是れ蓋し成敗を以て是非を爲し、炎涼を以て去就を爲す者、之を説くと云う。

この書にある王禹偁の二度目の左遷の原因は、開寶皇后宋氏の葬儀の問題で、王は密告によつて太宗の不興を買ひ翰林學士を罷免されたことであるが、丁謂がその原因を密告に歸せず、王の性格的問題に歸したことに對して、王はこのように非常に強い語調で怒り、丁謂を「以成敗爲是非、以炎涼爲去就者」と貶し、「吾れを知る者に非ず」と断對して憐れぬものを感じていたことの表れと考えられよう。

王禹偁は丁謂が後世惡評噴々たる宗教儀式に手を染める前に亡くなるが、その生前すでに丁謂に對する見方が變化していたことは次の資料からも明らかである。

丁謂の詩に「天門 九重に開き、終に當に臂を掉つて入るべし」と有り。王元之禹偁之を見て曰く、「公門に入るに猶ほ鞠躬如たり、天門豈に臂を掉つて入る可けんや。此の人必ず不忠ならん」

(優古堂詩話「詩可以觀人」)

先に言及した東氏の論文では、「答丁謂書」には丁謂が恩師王禹偁に「反旗を翻」したことが見て取れるとし、その背景には、「行卷」という風習が景德四年(1005)の省試への糊名法導入まで存續して

いた可能性と、王禹偁の行巻を利用した古文運動の展開があつたとして次のように述べておられる。

すなはち、丁謂は若い頃より古文を信奉していたが故に、それによつて行巻を行つたのではなく、時の有力者で推擧の勞を厭わなると評判の高い王禹偁に認められることを直接の眼目として古文を用いたと結論づけられる。行巻の風習を利用して進めようとした王禹偁の古文運動を、結果としていわば逆手にとる形で自己の賣名手段として利用したのである。

北宋初期において、行巻がどの程度科擧に影響力を持つたかはもう少し検討されるべきであると考えるが、この『行巻』という風習への着目は興味深く、本論も東氏の論から大きな示唆を受けた。さらに東氏は「自らが官途に就き西崑派の人々と交流し政治的に出世するために必要としたのは駢文作家の技量であつた」と、西崑體、駢文が丁謂にとつて出世の手段であつたことをも示唆する。

古文と駢文については、王禹偁自身「壯夫爲らずと雖も、亦仕進の羽翼なり、而して無かる可からず」（答張知白書）と述べ、職業的な駢文と、古文家としての活動の兩立を認めており、丁謂が二者擇一的に「破れ靴を脱ぎ捨てる様に古文をうち捨て、駢文に大きく足を踏み入れ」（東氏同論文）たとは考えにくい。むしろ丁謂は時と場合によつてどちらをも巧みに使いわけ政治的手段として利用していたと考えるのが妥當ではなからうか。

東氏は丁謂を西崑派詩人と規定した上で右の論文を進めておられるが、先述したように丁謂の現存詩は『西崑酬唱集』の作品以外は殆どが平易な語を用いた典故の少ない詩であり、彼の到達點を西崑體詩とみなすことには少々無理がある。丁謂の西崑體に對する態度は、東氏

のいわれる古文に對するものと同様ではないのか。そして文學を政治に利用するという傾向は丁謂の全生涯に亘るものであり、それは以上に述べたような丁謂の政治的人生と深く關つたものであつた。

以下において、『西崑酬唱集』が行われた數年間の丁謂の政治的經歷に着目しながら、西崑酬唱への参加が丁謂にとつて政治的の手段にすぎなかつたことを明らかにし、その作品數、内容、時間から見ても、『西崑酬唱集』中の作品は決して丁謂の作品全體を代表するに足るものではなく、丁謂を「西崑派詩人」と見なす從來の詩派分類は訂正されるべきであることを主張したい。さらには丁謂の西崑體詩の分析を通じて從來典故の多用のみを唯一の特徴とされることの多かつた『西崑酬唱集』の詩の評價にも少しく修正を施したいと考えている。

### 三

まずは『西崑酬唱集』に入集した丁謂の作品の内容を分析したい。丁謂の作品は全部で五首であるが、最も早い時期の作品は景德二年末の「代意」である。そして景德三年秋には「荷花」、「再賦」、「又贈一絶」の一連の荷花の詠物詩と「梨」と題する詩とに唱和している。

會棗莊氏は『論西崑體』（麗文文化公司 1993年）第三章において、丁謂の最初の唱和詩「代意」を表面的には男女の戀愛を詠じているが實は君臣の情を述べる詩であると分析している。『西崑酬唱集』の注釋者鄭再時氏も題下註に「代意は情中に鬱として積もりて發するを得ず、男女離合に托して、以て幽怨の思ひを寄す」と述べ、幽怨に託した楊億の政治的不遇の意を認めている。このような詩の内容から見て、「代意」は丁謂のその他の詠物詩とは趣の異なつた詩といえるであらう。

原唱は楊億の「代意」二首で、丁謂・李宗諤・刀衍・劉筠・劉濟が唱和している。丁謂は楊億が寵愛を失つて空閑を守る女性の怨みに託して自己の朝廷における不遇を嘆き（第一首）、君主に疎まれ孤立無縁の状態でも、なお變わらぬ忠誠心を訴える（第二首）のを承けて、次のように詠じている。

- ① 玦帶珊瑚珮解瓊　玦は珊瑚を帶び　珮より瓊を解く
- ② 楚雲無定好傷情　楚雲定まる無く好く情を傷るべし
- ③ 臨邛已誤通琴意　臨邛已に誤まる　琴意を通ずるを
- ④ 金谷難尋辯玉聲　金谷　尋ね難し　玉聲を辯ずるを
- ⑤ 徵警單棲盤露重　徵しく單棲を警めて盤露重く
- ⑥ 密含幽思畹蘭平　密かに幽思を含んで畹蘭平らかなり
- ⑦ 明珠百琲將何當　明珠百琲　何を將てか當てん
- ⑧ 恨望輕軀病欲成　恨望す輕軀の病成らんと欲するを

第一二句では、漢の成帝の皇后となつた趙飛燕を象徴する「玦帶珊瑚」（『西京雜記』）、劉向『列仙傳』の江妃二女の記事に據る「說解瓊」、「高唐賦」に由來し男女の交情を意味する「楚雲」等の語を用い、寵愛が移ろいやすく、心は變わりやすいものであることを述べる。

第三句は司馬相如が琴を弾いて卓文君の氣持ちを引いたという故事（『漢書』「司馬相如傳」）に據るが、「已誤」とは、もはや二人の氣持ちを通わせることができなくなつてゐることを言おう。第四句は石崇の愛妾翔風が玉の音を善く聞き分けたという故事（『拾遺記』）に基づくが、「難尋」はもはやそのような才能を有する人を探し出すことは出來ないという意であらう。ここで丁謂は楊億がもはや讒臣達に阻まれて帝と心を通わせることができなくなつた状況と、帝は楊億という才能ある忠臣を失つたことで、正しい政治状況の判断が困難になつたと

いうことを諷刺的に詩に詠じていると考えられよう。

五、六句で丁謂は楊億の孤立無援の状況と、その苦しい胸の内を詠む。「徵警單棲盤露重」は周處『風土記』の「白鶴性警なり。八月に至りて白露降り、草葉上に流れること滴滴として聲有らば、即ち鳴く。」という箇所をふまえてはいる。しかしこの句はそのように單に秋の深まりを詠するだけではない。「盤露」という語は『漢書』「郊祀志」上の顔師古の注に「三輔故事に云ふ、建章宮の承露盤高さ二十丈、大きき七圍、銅を以て之を爲る。上に仙人の掌の露を承くる有り。玉屑を和へて之を飲む。」として見える前漢武帝の故事とされる承露盤中の露に外ならない。

この「盤露」（「金莖」も同意）は、しばしば李商隱が唐の武宗の神仙方術への耽溺を戒め批判する詩の中で使用しているものであつた。例えば李商隱に以下のような句がある。

侍臣最有相如渴、不賜金莖露一杯。〔漢宮詞〕

…承露盤晞甲張春、王母西歸方朔去。〔漢宮〕

周王傳叔父、漢后重神君。玉律朝驚露、金莖夜切雲。

〔昭肅皇帝挽歌辭三首〕其二

李商隱は、英明でありながら神仙方術のために急逝した唐の武宗を悼んでいるのだが、宋の眞宗も武宗同様、道教を奉ずる宗教活動に没頭し、國家財政をつぎ込んで大規模な宗教的事業を次々と行い、大いに玄風を開いていく皇帝であつた。

眞宗がとり行つた一連の崇道事業は後に丁謂自身がその活動の中心となるのだが、この詩の作られた景德二年の段階ではまだ眞宗の崇道も國家的規模には至っていない。しかし、眞宗の崇道には蔽い難いものがあり、そうした皇帝の嗜好への批判は、例えば楊億「秋夜對月」

に「警鶴 仙盤の外」とあるが如く、西崑酬唱の中ではしばしば行われていたことであつた。

丁謂がここで「盤露」の句を用いたことは、楊億ら同様漢の武帝の典故によつて、眞宗の崇道批判を盛り込んだものと考えられ、この詩が詠まれた時点では丁謂自身當時の政治に對する批判を詩に盛り込みうる立場にあつたことを示すといえよう。

第六句は、屈原の如く孤立無縁の中で國家の行く末を思い悩む楊億の姿と讀める。五、六句で丁謂は、自分が朝廷を去つた後、帝が諫言をする忠臣のないままに迷信活動に走ることを恐れ、疎んぜられてなお皇帝を案ずる楊億の思いを代辯しているのではなからうか。

七、八句も『拾遺記』の石崇の故事に據る。石崇は華奢な愛人に眞珠百琲を與えて寵愛したが、ここではもはや寵愛を受ける手だては無いと説く。楊億に對して丁謂は、もう皇帝と氣持ちを通じ合せることは困難であるのだからいたずらに苦惱するなどと慰めてゐるのだらう。

さてこの「代意」という詩題であるが、管見の及ぶ限りでは『西崑酬唱集』が初出である。しかし、李商隱「魏宮に代わりて私かに贈る」の詩の自注に「黃初三年、已に存歿を隔てて其意を追代す、何ぞ必ずしも同時ならんや、亦た廣く子夜吳歌の流變なり」とあり、「代意」はこの「其意を追代す」に由來するものではないかと考える。

李商隱には「代：」という詩題がいくつも見られる。その中で『西崑酬唱集』の「代意」と最も内容的な關連があると考えられるのが「魏宮に代わりて私かに贈る」と「元城の吳令に代わりて暗かに答えて爲す」の贈答形式の二首である。兩詩は『洛神賦』の内容を踏まえ、亡き甄皇后と曹植の戀愛に題材をとつたものであるが、「魏宮に

代わりて：」が甄皇后の曹植への變わらぬ情愛を傳えるのに對して、「元城の吳令：」は男性の心變わりを詠じている。つまりこの贈答詩は『洛神賦』の世界を敷衍して女性側の報われぬ思いを詠じたものである。楊億の「代意」もやはり女性側の報われぬ片思いであり、寵愛が衰えてもなお自分の男性への氣持ちは變わらないという詩の内容は、李詩とつながりがあるといえよう。

また曹植は亡き人との戀愛を想起させる存在であつたばかりでなく、兄の曹丕に疎まれていたことによつて、政治的不遇に迫りやられた歴史上の人物の代表でもあつた。この意味でも政治的不遇を詠じる楊億の「代意」は曹植との關連が認められる。つまり『西崑酬唱集』の「代意」は「其意を追代す」という意の詩題を用いて、女性の片思いを詠じた形式を取る李商隱の詩の世界に、曹植の政治的な不遇意識のイメージをも重層させて作られた可能性が高いと考えられるのである。

『許彦周詩話』に、「李義山の詩、字字鍛鍊し、用事婉約にして、仍ほ多く近體なり」とある。確かに『西崑酬唱集』所收の詩はすべて近體詩であり、華麗な言語と典故の多用を「典型」として作られ、さらに上述した「代意」の詩題からわかるように、李商隱の影響は少ななしとしない。

丁謂の「代意」も「玳瑁珊瑚」、「珮解瓊」、「楚雲」、「臨邛通翠意」、「金谷辯玉聲」、「微警單棲」、「盤露」、「幽思」、「晚蘭」、「明珠百琲」等數多くの典故を使つた華麗な近體詩で、李商隱を學んだ西崑體の特徴を備えた作品と言えるであらう。しかしこうした表面的な形式のみならず、詩の内容にまで目をむけてみると、この詩は李商隱の單なる

模倣にはとどまらぬ所がある。

「代意」に詠じられた楊億の政治的不遇は、當時の實際の状況を反映したものである。景德三年(1000)に翰林學士に任じられる以前から、楊億はその文才を眞宗に愛されたが、生來の剛直で人と相容れない性格が災いし、周圍の讒言によつて眞宗との關係にも次第に龜裂が生じていった形跡がある。歐陽脩『歸田錄』は次のように言う。

楊文公億文章を以つて天下を擅にす。然れども性特り剛勁にして合ふこと寡し。之を惡む者有り、事を以て之を譖る。大年學士院に在り。忽ち夜一小闌の深く禁中に在るに召見せらる。既に見て、茶を賜ひ、從容として顧問す。之を久しうして文彙數筐を出し、以て大年に示して云はく、「卿朕が書蹟を識るか。皆朕自ら起草して、未だ嘗て臣下に命じて代作せしめざるなり。」と。大年惶恐して對ふる所を知らず、頓首再拜して出づ。乃はち知る、必らず人の譖る所と爲りしを。是に由りて佯狂して、陽翟に奔る。眞宗文を好み、初め大年を待して眷顧比ひ無し。晚年恩禮漸やく衰ふるは亦此に由るなり。

また、このころから政治的立場を異にする王欽若との關係が悪化し始めていたと考えられ、當時眞宗に最も近く侍していた王欽若との對立は楊億の朝廷での居心地を悪くさせていたことは想像に難くない。「代意」はそのような立場におかれていた楊億の眞情の吐露と見なしうる。

丁謂の唱和詩は、そうした楊億の苦衷を察した内容である。また詩中の「盤露」の故事は、李商隱の典故の使い方を學んでいるものであるが、ここでは眞宗の崇道という時代状況にうまく重ね合わせて用いられたものであり、形だけの模倣にとどまらず、現實を寫した詩語と

して詩中に效果的に使われている。このように丁謂の「代意」は西崑體としての形式を整えるのみならず、内容的にも十分に北宋初期の勢を反映した一首として評價できるのである。

#### 四

これまで西崑體を論じる場合、典故の多用、言語の妍麗と巧緻等の特徴を唯一の判断基準とすることがままあった。例えば先に引用した東氏の論文の中では、『西崑酬唱集』の丁謂の「梨」という詠物詩を取り上げて次のような分析する。

この詩で注目すべきことは、漢の武帝の故事を巧みに取り入れ(「曾て青棹を伴ひて武帝に薦らるる」)、且つ「清香」(「上林の風馭清香を獵る」)、「瓊樹」(「芳を尋ねて尙ほ憶ふ瓊樹と爲るを」)、「玉有漿」(「渴を饒いて困りて知る玉漿有るを」)等の華美な修飾語を駆使するという點である。かかる特色は、誠に西崑體特有の表現技巧だと言えよう。

氏はこの一首のみを取り上げて丁謂の西崑體詩を代表させている。先述したように『西崑酬唱集』所收の丁謂の詩は「代意」以外はすべて詠物詩であるが、詳細に分析すれば、「梨」のように典故を多用するのみの無味乾燥なものばかりではなく、いくつかの作者の工夫を指摘できる。只一つの詠物詩の分析だけでは五首といえども丁謂の『西崑酬唱集』の文學的達成の全體像すら把握し得ないと思われる。

例えば景德三年の秋に唱酬が行われた「荷花」は五言排律という形式で詠まれた詩であるが、丁謂は「採蓮女の戀」を主題とした劉・楊・錢の三詩の趣向とは異なり、自身の想像力を働かせて蓮の花を美女に見立てて詠じたところに独自の工夫がみられる。



相倚秋風立 相倚りて秋風に立ち

蘭言似有無 蘭言有るか無きかに似たり

未饒霜女俊 いまだ霜女の俊を饒さず

不愛月娥孤 月娥の孤を愛さず

力弱烟披素 力弱くして烟素を披き

心危露泣珠 心危うくして露珠を泣なす

最終の一聯には、「江を涉りて如し探る可くんば、百非もて輕軀に答へん」とあるが、これは先の「代意」の「明珠百琲將何當、恨望輕軀病欲成」同様『拾遺記』の石崇の故事を用いている。しかし「代意」のような憂鬱で重苦しい雰圍氣は影を潛め、求愛のことばとして用いられている。このことは丁謂がさまざま典故を自家藥籠中の物とし、詠物詩を作る際にそれを臨機應變に使うことができたということの證左である。

同じく蓮を詠じた「再賦」では典故の使い方に工夫が見られる。丁謂は必ずしも蓮に關連のある故事にこだわらず、「笑ひて傾く行雨の國、香りて返す夢蘭の魂」の對句では「返魂香」(梅)、「夢蘭」(蘭)等、他の花の典故も自由に用いている。また「蛺蝶 媒妁すること無く、鴛鴦 子孫を見はず」という對句では「蛺蝶」、「鴛鴦」という戀愛詩中によく運用され一般的に男女の形影不離の様を表す詩語を用いているが、ここでは蓮の實が結ばれるための「媒妁」をその存在という新しい視點を加え、「池に浮かぶ蓮の花は他の草花とは違い、蝶ではなく蓮のそばを仲良く泳ぐ鴛鴦が仲立ちをして實をつけさせる」と唱う。花の交媒の仲立ちとして「蛺蝶」を陸のもの、「鴛鴦」を水中の存在として對比させて用いたところに丁謂の詠物詩に對する新しい感覺が見られる。

同様に蓮を詠じた「又贈一絶」では詩中に「高唐賦」の世界を取り入れ次のように詠じる。

夢散高唐夜正遙 夢散じて高唐夜正に遙かなり

楚天何處不無憐 楚天何れの處か無憐ならざる

秋風似會荆王意 秋風 荆王の意を會するに似たり

露渚烟汀養細腰 露渚 烟汀 細腰を養ふ

この詩は、李商隱の「楊柳枝二首」其一「暫らく樽酒に憑つて無憐を送る、損なう莫かれ秋眉と細腰とを。人世 死前に唯だ別れ有るのみ、春風争でか長篠を惜むに擬せんや」を承けたものである。李商隱の原詩は春の「柳」を詠じたものであるが、丁謂は季節を春から秋に置き換えて、「秋風はまるで楚の荆王が美女との逢瀬を楽しみたいという氣持ちを知るかのようにだ。もやのかかった池のほとりに盛んに蓮が花開いて秋風に揺れる様は、ほっそりした腰付きのたおやかな美女が妍を競っているようだから」と詠じている。

ここにも、李商隱の「柳」の詩を「蓮」を詠じる際に下敷にし、季節を轉じるばかりか「細腰」に花のイメージを重ねるといった種々の工夫が窺われる。

西崑體は北宋初期に一世を風靡したものの、後にはその弊害が叫ばれて文學史上の評判が芳しくない。吉川幸次郎氏が『宋詩概説』の中で『西崑酬唱集』を「二百年前の李商隱の詩の完全な模倣であり、それを一步も出ない。新しい詩を作ろうとする意欲も、したがって効果もない」と酷評する如くである。

しかし本論で分析した『西崑酬唱集』の一参加者に過ぎない丁謂の數首の詩にも、「代意」の「盤露」のように、李商隱常用の詩語を同

時代の状況を反映させて再生させる作品も存した。また詠物詩の中にもその物に關連する典故の羅列に終始するばかりではない、作者の様々な工夫が見られた。

このことは、楊億・劉筠・錢惟演という『西崑酬唱集』を代表する作者について、彼らの作品が本當に李商隱詩の模倣を一步も出ないものであるのかどうかの再検討を促す契機ともなる。西崑體の形式的な特徴のみならず、時代状況を反映させた多彩な内容にも目をむけて作品を仔細に分析すれば、李商隱の模倣のみには終わらない『西崑酬唱集』の作者の意境を見いだす事ができるのではなからうか。

その顯著な例として、楊億の原詩に劉筠・錢惟演が唱和した「宣曲二十二韻」をあげることができよう。この詩は、「前代掖庭の事を述べ、事浮靡に渉る」として嚴重注意の勅令が出されたといういわくつきのものである。そのことは『續資治通鑑長編』卷七一（大中祥符二年正月）に記載されており、その注で次のように言う。

江休復云はく、「上南衙に在り。嘗て散樂伶丁香畫を召して恩幸を承けしむ。楊劉蔡林に在りて宣曲の詩を作る。王欽若密奏し、以て寓諷を爲す。遂に著令して僻文字を戒めしむ。」と。

また、陸游の「跋『西崑酬唱集』」（『渭南文集』卷三十一）では

祥符中嘗て詔を下して文體の浮豔なるを禁ず。議者謂へらく、「是の時館中宣曲の詩を作る。宣曲は東方朔傳に見ゆ。其の詩盛んに都下に傳わりて劉楊方に幸せらる」と。或ひと謂へらく「頗る宮掖を指す」と。又二妃皆蜀人にして、詩中に「酒を臨邛の遠きに取る」の句有り。頼ひに天子の才士を愛すれば皆置きて問はず。獨り詔を下したるは諷の切なるのみ。然らずんば亦た殆きかな。

江休復は散樂伶丁香畫、陸游では劉楊二妃と眞宗が耽溺する對象は各々異なるが、いずれにしても、當時この「宣曲」の詩に眞宗の逸樂への諷諭が込められているという見解は一致している。

「宣曲」は皇帝の寵愛を身に受けていた頃の華やかな後宮での生活と、やがて寵愛を失い嘆きのうちに死を迎える女性の運命を描いた詩であるが、詩中には皇帝が女性にかまけて政治をおろそかにするという故事を典故にした句が多く見られる。例えば、晉の武帝の後宮に女性性が極めて多く、帝は羊車の行くにまかせ、たどり着いた女性と一夜を共にしたという故事を用いた「羊車竹を挿して迎う」（楊億）や、政道を顧みず夜出游した南朝齊の武帝の故事を踏まえた「北埭鷄鳴を聽く」（楊億）、酒と女性に溺れた陳の後主の故事を用いた「空しく傳う狎客の詩」（錢維演）等の句が見られる。また劉筠の「天機 此れ従り淺く、國豔或いは良に非ざらん」の句は、『莊子』「大宗師」の「其の善欲深き者、其の天機淺し」を典故とし、皇帝が政治を顧みずに身分の低い女性に耽溺したことを言おう。王仲舉『西崑酬唱集注』の注では、「獨り丁香の出身のみ散樂伶ならず、即ち劉、楊二妃も亦た均しく寒賤自り出づ。」と述べ、この句は劉筠が暗に眞宗の寵妃達を指すとす。

眞宗の後宮には三百餘人がいたといわれるが、景德元年劉氏は美人に、楊氏は才人になつてゐる。中でも眞宗は寒門出身ですでに人の妻であつた劉氏を特に寵愛し、大中祥符六年には皇后に立てようとしたが、多くの臣下がそれに反對した。楊億もその一人で、帝は立后の詔勅を楊億に起草させようとしたが、楊億が拒絶したという経緯がある。結局劉氏は皇后となるが、このような眞宗の後宮問題に楊億が早くから批判的であつたことは豫想される。そして景德二年に作られた

「宣曲」がこのような時代背景を持つことを考えると、その諷刺性を王欽若らに密告されたことも無理からぬことと思われるのである。

『西崑酬唱集』の中で彼らの生きた時代を反映した詩はこればかりではない。「漢武」、「明皇」、「始皇」等の詩も、「宣曲」同様に歴史上の故事に假託して當時の政治諷刺や眞宗批判をしていると考えられる。楊億らがどのように李商隱の世界を北宋初期の當代性を備えた詩として再生させているかの總體的な把握は別稿を期したい。

再び丁謂の問題に戻る。先述のように西崑體にもその詩才を示し得た丁謂が、なぜ『西崑酬唱集』の初期にしか参加せず、詩數も五首にとどまったのか、という問題について、酬唱が行われた時期と彼の政治活動との關連において考察したい。

## 五

上述したように、私は『西崑酬唱集』所載の丁謂の作品は偶然の産物であり、丁謂の西崑酬唱への参加は彼の詩人としての全生涯を規定するものではなく、社交上の一手段にしか過ぎなかつたのは間違いないと考える。

『西崑酬唱集』の主要な作者は楊億・劉筠・錢惟演の三人でありそれぞれ七十首前後の詩が収められる。その三人を除く他の十數人の作者は皆たまたま唱和に参加したという程度であり、最も詩の數が多い者でも七首、わずか一首のみの者もいる。丁謂も五首という詩の數から見て、首唱者として西崑酬唱に参加したのではなかつたと考えるべきであらう。

丁謂の西崑酬唱に對する態度は極めて消極的である。五首は全て唱

和詩で、酬唱への参加も二、三度にとどまり（「荷花」、「再賦」、「又贈一絶」、「梨」の四首の詠物詩は連續して『西崑酬唱集』に収められており、製作は同時か、あるいは非常に近い時期と考えられる）、しかも酬唱の前半の二年間に關わりを持つたにすぎない。さらにその四首までが詠物詩で、丁謂の作品中最も早い時期に作られた「代意」を除いては、當時の政治體制への批判を含む先述した楊億らの「宣曲」のような詩の酬唱には参加していない。西崑體がその諷刺性を多様な典故の中に隱蔽することは範とした李商隱と同斷だが、丁謂はその上慎重に詩題を選んで危険を回避していたと考えられよう。

『西崑酬唱集』に参加した數人の中で、丁謂は政治家として惡名が高く、西崑酬唱に参加した人々との間にも、後に激しい確執を生じている。例えば張詠は『西崑酬唱集』に二首の詩を登載する人物だが、その死に際して丁謂の姦邪を奏上し、おおいに罵つたという記録が残つている（『續資治通鑑長編』卷八五、大中祥符八年八月）。

この丁謂が姦邪の態を顯しはじめたのは大中祥符元年、即ち楊億らの西崑酬唱最後の一年に行われた「東奉泰山」問題を契機とする。これ以降眞宗は王欽若と丁謂との畫策によつて「天書偽造」、「西祀汾陰」、「南謁亳州」、「玉清昭應宮建設」等の道教を奉ずる宗教活動に次々と國家財政を注ぎ込んでいく。同時に丁謂は眞宗の崇道の支持者、宗教活動の推進者として、次第に朝廷での地位を確固たるものにしていくのであるが、それ以前の丁謂は有能な官僚として評價が高かつた。すなわち西崑酬唱が行われた時期は、丁謂が三司使として財政面に能力を發揮すると同時に、劣跡斑々たる一連の活動を開始する時期と重なつていたのである。

西崑酬唱の行われた四年間を、丁謂の政治活動と對比させて考える

と、丁謂がなぜ『西崑酬唱集』の初期にしか参加せず、詩數も五首にとどまったのかという問題に解答が得られるのではなからうか。

前述のように北宋の眞宗は道教を愛好した皇帝として名高く、徽宗と並んでおおいに宋代の玄風を開いた皇帝であった。卿希泰氏は『中國道教史』<sup>23</sup>の中で、眞宗の道教を奉じての宗教活動を二つの時期に分けている。卿氏によると、「第一期は、至道三年(974)の即位から景德四年(1007)までで、この時期は活動も通常の範圍にとどまる。第二期は大中祥符元年(1008)から乾興元年(1022)までで、皇帝は道教を大いに尊崇し、道教を積極的に自己の統治基盤を固めるための道具として利用した」と述べる。卿氏の言う第二期は、まさしく丁謂と王欽若の二人が首謀者となつて、宗教活動が國家規模で行われた時期であるが、眞宗即位から十年間の第一期についてはまだ丁謂は荷擔しておらず、この第一期の皇帝の崇道に大きな影響を與え、活動の中心だったのは王欽若である。

王欽若は咸平四年(1001) 參知政事となり、眞宗即位の年にはすでに朝廷の重臣であつた。彼は深く道教に通曉し、この方面の著述も多く遺している。<sup>24</sup>

咸平年間(998-1003)、丁謂はまだ中央にはおらず、この時期の眞宗の道教がらみの活動とは無關係と考えられる。夔州から歸朝後も、景德四年まで丁謂が道教に關わつたという資料は無い。この時期、丁謂と王欽若との關係は大中祥符元年以降ほどには親密ではなかつたであらう。むしろ當時の情勢や丁謂の治績について考えると、丁謂と王欽若は政治的には反對の立場にあつたと考えられるのである。

景德元年、遼との講和問題で、王欽若は早期の和議を主張し、強硬派の寇準・楊億らと激しく對立していた。十月眞宗が澶淵に親征した時、丁謂は知鄆州兼鄆・齊・濮安撫使に任せられ、遼との國境に程近い地に在つて、戦火に逃げまどう民を救ひ、敵を撤退させるという活躍をしていた。<sup>25</sup>このような丁謂の行動と、寇準が若き丁謂の才能を評價していたことなどを考え合わせると、丁謂はこの時期寇準・楊億ら主戦派よりの立場をとり、和平派の王欽若とは對立していたと思われるのだ。

西崑酬唱の行われた景德二年からの四年間、丁謂は朝廷にあつて三司使という重要な職務に任せられ、財政面の權力を掌握し、經濟官僚として眞宗の信任を得ていつた。すなわちこの間は丁謂が次第に朝廷での勢力を擴大していつた時期といえよう。そしてさらなる勢力擴張を求めて、當時朝廷で皇帝に信任の厚かつた王欽若と手を結び、悪名高い眞宗の一連の道教がらみの活動に荷擔する道を選択していつたのではないかと推測される。<sup>26</sup>

こうして見ると、『西崑酬唱集』の詩の酬唱が行われた四年間は、丁謂が朝廷における政治的立場を寇準・楊億一派寄りから、次第に王欽若派に移行していく時期であり、『西崑酬唱集』中の丁謂の作品は、正に彼のこの時期の政治的立場の微妙な變化を反映しているものだと考えられる。

丁謂の『西崑酬唱集』への参加状況をまとめると、景德二年の末から三年の間に作られた「代意」は、丁謂が参加した中で唯一當時の政治への不満を表明した作品であり、丁謂自身の詩にも、この時点ではまだ反對勢力であつた王欽若をブレインとする眞宗の道教信奉に對する批判を込めた「盤露」という語が見られた。景德三年の秋に作られ

た「荷花」、「再賦」、「又贈一絶」、「梨」の四首はすべて詠物詩であり、その中にはもはや顯著な寓意は認められない。そして「梨」を最後に、西崑酬唱の後半の二年間には丁謂は参加していないのである。

また丁謂が参加しなくなった後半の二年にあたる景德三年から四年にかけては、『歴代名臣事跡』の二人の編集官である楊億と王欽若の關係が次第に悪化した時であつた。『續資治通鑑長編』卷六七の記載には次のようにある。

欽若人と爲り傾巧。修する所の書、或とき上意に當たり褒賞の及ぶ所、欽若即ち自ら表首に名づけて以て謝す。或とき謬誤して譴問さるること有れば、則ち書吏を戒め、楊億曰下の爲す所と稱して以て對ふ。同僚皆これを疾み、陳越をして寝ること尸の如くならしめて以て欽若と爲し、石中立 欽若の妻と爲りてその傍らに哭し、餘人歌い虞あはれて前に殞す。欽若これを聞きて密奏し、將に盡く細責せんとす。…億館中に在りて、欽若或とき續いで至れば、必ず避けて出づ。他所も亦然り。

このように、この頃すでに楊億が王欽若との同席を拒むほど兩者の關係が悪化しており、楊億の周圍でも王欽若の露骨に皇帝におもねろうとするやり方に對して相當の批判があつたことは明らかである。そして二人の關係の悪化にともなつて丁謂もまた楊億と王欽若とのどちらに荷擔するかについてはつきりとした態度を示さざるを得なかつたことが推測される。

歴史的には、大中祥符元年四月、丁謂が眞宗から「東奉泰山」に際しての費用の下問に、「大計 餘り有り」（充分にごさいます）と答えた時點で、王欽若側の政治的立場にあつたことは明確である。それ以前の景德三年から四年にかけて、丁謂はすでに西崑酬唱に集う楊億ら

のグループとの交際がなくなつていたのではないか。そしてそのことが、景德三年の秋を以つて終わる『西崑酬唱集』への参加狀況に如實に反映しているのではないかと思われるのである。

以上のように、丁謂が西崑酬唱に参加して詠じた作品はわずかに五首に過ぎないが、その作品の内容と入集時期とは彼の人生の轉換期を反映したものであつた。また詩中に丁謂が楊億に對して示した友情も決して偽りではなく、後に丁謂が寇準派の一掃を謀つた時にも、楊億の才を愛した丁謂は彼だけは朝廷にとどめたほどであつた。しかし、楊億と政治的立場を異にする道を選んだ丁謂は、そのことによつて楊億らとの文學的つながりをも斷つたことが『西崑酬唱集』への丁謂の参加狀況から窺われる。

つまり西崑體による詩の應酬は丁謂にとつて政治活動の一部分であり、西崑體詩は政治的立場によつて使い捨て可能な出世の道具にすぎなかつたのではなからうか。このような丁謂の西崑體に對する態度を考えると、丁謂を「西崑派詩人」と位置付けることは正鵠を射てゐるとはいえない。

同様の問題は『西崑酬唱集』の他の作者についても検討されるべきである。先に述べた如く、主要な作者である楊億・劉筠・錢惟演以外、詩の收錄數は李宗諤七首、薛映・張秉六首、劉隲・丁謂五首、李維・任隨・舒雅三首、刁衍・張詠・錢維濟・晁迥二首、陳越・崔遵度一首と楊億らに比べて非常に少ない。これらの詩人については當然『西崑酬唱集』以外の作品を仔細に検討した上で、彼らにとつて西崑體詩は西崑酬唱にたまたま参加したために單に「酬唱」を目的として作られた詩であるのか、それとも名實ともに西崑派詩人といえるのか

どうかを判断すべきであろう。例えば張詠のように詩文に宋初の古文派の風格を持つ者は、『西崑體』詩はある程度社交のために作ったものであったことが豫測できる。しかし丁謂ほどその「社交」の裏に、政治的打算が見えかくれする詩人は、『西崑酬唱集』の中でも特異な存在と考えられるのである。

本論文では、『西崑酬唱集』中の一詩人丁謂について、『西崑酬唱集』に作品が載せられているというだけで丁謂を「西崑派」とする従来の詩派分類に疑問を呈した。しかし、数少ないながら丁謂の西崑體詩を仔細に検討すると、時代状況を反映する内容を有し、單なる李商隱の模倣として一蹴すべからざるものがあつた。このことを『西崑酬唱集』全體の再評價を促す契機として、今度は『西崑酬唱集』の首唱者である楊億ら三人の作品を中心に廣く入集作品を見渡し、史實との連關に着目しつつ、その豊富な内容に留意しながら分析をし、『西崑酬唱集』の再検討をしていきたいと思う。また、本論は丁謂の『西崑酬唱集』所收の詩のみを論ずるにとどまつたが、私見によれば現存作品中丁謂の最高の文學的成就は宰相の地位を逐われ、中央政界を離れた後の、海南島で作られた諸作である。この問題については稿を改めて論ずるつもりである。

注

- (1) 鹿兒島大學文科報告第22號第一分冊1991年。
- (2) 孫何(961-1004)字は漢公。王禹偁によつてその才能を丁謂と並び稱された。丁謂と同じく淳化三年の進士(孫何は狀元、丁謂は第一甲第四名)。

丁謂と『西崑酬唱集』

(3) 丁謂の詳しい事跡については、拙著『丁謂研究』(巴蜀書社 1998年4月)参照。

(4) 『宋史』卷二八三「王欽若傳」欽若與丁謂、林特、陳彭年、劉承珪、時謂之五鬼。

(5) 『續資治通鑑長編』卷九六(天禧四年七月丁丑)朝士與(寇)準親厚者、丁謂必斥之。楊億尤善準、而請太子監國奏又億所草也。及準敗、丁謂召億至中書、億懼、便液俱下、面無人色。謂素重億、無意害之、徐曰、謂當改官、煩公爲一好詞耳。億乃稍安、卒保全之。

(6) 『續資治通鑑長編』卷一一〇(景祐四年閏四月己亥)光州言祕書監致仕丁謂卒。王曾聞之、語人曰、斯人智數不可測、在海外猶用詐得還。若不死、數年未必不復用。

(7) 西湖照慶寺の高僧省常を中心とした詩の結社。丁謂の詩序の外、宋白『大宋杭州西湖照慶寺結社碑銘』孫何『白蓮社記』等の資料から參加者に當時の高位高官が名を連ねていたことがわかる。

(8) 寂照(俗名大江定基)と丁謂との交際は楊億『楊文公談苑』「寂照」に見える。丁謂は寂照の才を愛して故郷蘇州の普門寺に留め、寂照は丁謂に「黒金水瓶」を贈っている。なお、寂照と普門寺については佐藤道生氏「寂照の遺跡」『日本漢學研究』第一號1997年、「匡房と寂照」『むらさき』第三四輯1997年)に詳しく。

丁謂の「送張無夢歸天臺山」、「送僧歸護國寺」等の詩は、丁謂と佛教僧侶との交際を示す詩である。

(9) 「過武陵甘泉寺留題」、「桂林資聖寺」等。

(10) 晩年左遷されて後も丁謂の執筆活動は盛んであり、崖州で『知命集』、『青衿集』等の詩集を編んだ外、「天香傳」を著して海南島の香料を論じた。また『東軒筆録』卷之三によれば、崖州で仁宗に「君心應に念ふべし前朝の老の十載飄流して斷蓬の若きを」という詩を贈り、仁宗がその詩に感じて丁謂を赦し、道州の司戸參軍に移したという話が見

- える。
- (11) 本論の『西崑酬唱集』詩の繫年については曾棗莊『論西崑體』第二章『西崑酬唱集』詩的起迄時間』による。同書の中で、曾氏は『西崑酬唱集』所載の詩が四季の變化に沿つて並べられていること等を根據に、本書が編年式に編纂されていることを結論している。
- (12) 鄭再時『西崑酬唱集箋注』上・下（齋魯書社1986年影印出版）
- (13) 『西崑酬唱集注』（中華書局1980年）で王仲孳氏は、『按ずるに此の詩は是れ楊億の姬人を追憶するの詩なり』と述べ「代意」をあくまで戀愛詩であるとするが、楊億の詩に唱和した劉筠、刁衍らの作品の中でもしばしば曹植、屈原、張衡の「四愁詩」等、政治的に不遇であつた人物の典故が使われていることを考え合わせると、やはり楊億の當時の政治的不遇を反映していると考えられる。
- (14) 松浦友久氏は著書『萬葉集』という名の雙關語』（大修館書店）の中で、副詞の平仄互用の例として、『好』が『宜』のかわりに用いられることを檢證されている。
- (15) 李商隱にも「東阿王」等、曹植の政治的不遇を典故にした詩作がある。
- (16) 交戦派の寇準・楊億らと對立していた王欽若は、澶淵の盟における功績によつて眞宗の覺えめでたかつた寇準を景德二年に讒言した（『宋史』「寇準傳」）。このため寇準は翌年二月宰相を辭することになった。
- (17) 括弧内池澤注。
- (18) 『晉書』「胡貴嬪傳」時帝多內寵…而並寵者甚衆、帝莫知所適、常乘羊車、恣其所之、至便宴寢。
- (19) 『南齊書』「武穆裴皇后傳」車駕數幸琅邪城、宮人常從、早發至湖北、鷄始鳴。
- (20) 『南史』「陳後主本紀」後主…荒於酒色、不恤政事…常使張貴妃、孔貴人等八人夾坐。江總、孔範等十人預宴、號曰狎客。
- (21) 『續資治通鑑長編』卷八〇（六月己巳）…及讓册皇后、上欲得億草制、使丁謂諭旨、億難之。因請三代、謂曰大年勉爲此、不憂不富貴。億曰、如此富貴、亦非所願也。乃命它學士草制。
- (22) 楊億の詩の再評價については、肖瑞峰氏（重評《西崑酬唱集》中的楊億詩）《文學遺產》1984年第一期）、高田和彦氏「楊億詩論——武夷新集」と『西崑酬唱集——（立命館大學『學林』第十一號1988年）、森山秀二氏「歐陽脩と西崑派——楊億評價を巡る問題——」（『沼尻博士退休記念中國學論集』汲古書院1990年）等においても言及されている。
- (23) 四川人民出版社1989年7月。
- (24) 『宋史』卷二八三「王欽若傳」欽若自ら道教に深達するを以てし、建明する所多し。道書を領校すること、凡そ六百餘卷を増す。
- (25) 『續資治通鑑長編』卷五十八（景德元年十月庚寅）…既而敵騎稍南、民大驚、趨楊流渡、舟人邀利、不時濟。謂給取死罪囚斬河上。舟人懼、民悉得濟。乃立部分、使並河執旗幟、擊刀斗以懼敵、呼聲聞百餘里、敵遂引去。
- (26) 吉岡義信氏は丁謂が王欽若と結託して眞宗朝の道教活動を推進していく背景を、寇準ら北方出身官僚と丁謂・王欽若ら南方出身官僚の對立と捉えている。當時まだ少數派であつた南方出身官僚の勢力を伸ばし、後の范仲淹、歐陽脩、王安石らの活躍基盤を築いたとする。（北宋初期における南人官僚の進出——特に王欽若、丁謂の場合——）鈴峰女子短期大學研究集報二（1955年）
- (27) (5) 參照。